源氏物語

四

昭和三年十二月一日印刷
昭和三年十二月四日發行

有朋堂文庫
源氏物語四卷（非賣品）

不許複製

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

源氏物語　四　目錄

早藏……一
宿木……二五
東屋……一三七
浮舟……二一五
蜻蛉……二九七
手習……三六五
夢浮橋……四四三
略系圖……四六五

源氏物語總索引……四七一—五二六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

㊀ 寂しき中君の生活、阿闍梨蕨土筆を中君に贈る
(一)日光は照さぬ隈もなければ、「日の光やぶしわかねばいそのかみ古りにし里も花は咲きけり」
(二)中君が
(三)姉大君と
(四)つまちぬ歌をよみても、姉が上の句をよめば妹が下の句をつくるといふ樣にし
(五)今は誰に語りて聞いて貰ふ事も出來ねば
(六)父を失ひし時の悲しさよりも

源氏物語

早蕨

梗概

㊀ 寂しき中君の生活、阿闍梨蕨土筆を中君に贈る。㊁ 匂宮、薫に中君を引取ちんとする事を語る。㊂ 中君引移の用意。薫、字治を訪ふ。辨の尼との對話。㊃ 中君字治を出でて京に移る。㊄ 中君二條院に入る。匂宮の寵愛。薫の失意。㊅ 夕霧の六の君登著、匂宮を聟にする事中止。薫を聟にせんとす。㊆ 薫二條院に中君を訪ふ。

やぶしわかねば、春の光を見給ふにつけても、いかで斯くながらへにける月日なら(一)むと、夢の樣にのみ覺え給ふ。行きかふ時々に隨ひ、花鳥の色をも音をも同じ心に起き臥し見つゝ、はかなき事をも、本末をとりて言ひかはし、心細き世の憂さもつらさも、打語らひ合せ聞えしにこそ、慰む方もありしか、をかしき事哀なる節をも、聞き知る人もなき儘に、萬かきくらし、心ひとつを碎きて、宮のおは

しまさずなりにし悲しさよりも、やゝ打勝りて戀しく侘しきに、如何にせむと、明け暮るゝも知らず惑はれ給へど、世に留るべき程は限あるわざなりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、

阿闍梨年あらたまりては、何事かおはしますらむ。御祈は、たゆみなく仕うまつり侍り。今は一所の御事をなむ、やすからず念じ聞えさする。

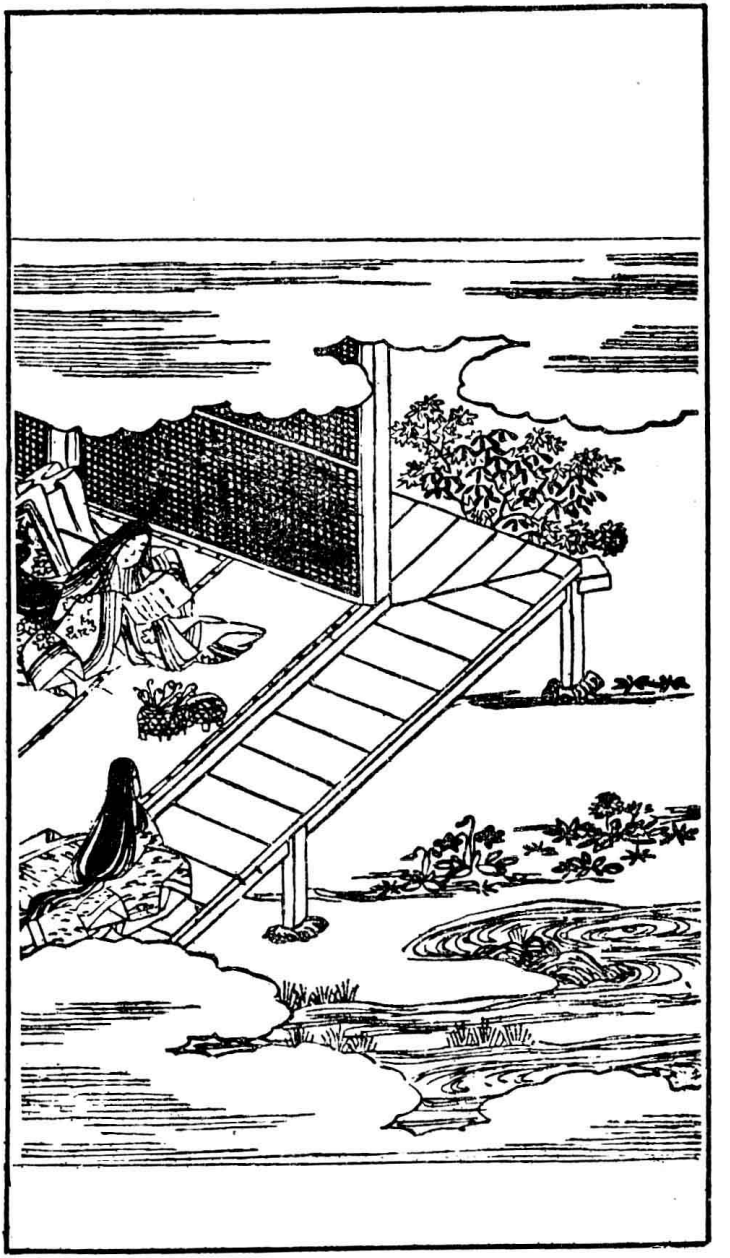
など聞えて、蕨土筆、をかしき籠に入れて、「これは童べの供養じて侍る初穂なり」とて奉れり。手はいと惡しうて、歌は、わざとがましく引放ちてぞ書きたる。

阿闍梨君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびなり

御前によみ申さしめ給へ。

とあり。大事と思ひまはして詠み出しつらむ、と思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりにさしも思されぬなゝめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましけに書き盡し給へる、人の御文よりは、こよなく目留りて、涙もこぼれば、返事

(一)中君が
(二)命はきまつて居るもの故
(三)中君の事ばかりを心にかけて佛に祈り居る
(四)我にくれたるものの初穂
(五)一字々々ぽつ〳〵と書きたり、假名を書きなれぬ樣也
(六)八宮在世の頃より必獻上し來りし故今年も差上ぐるぞと也、つみ―積み、摘み
(七)中君の御前へ取次いで下されと侍女等に宛てて言へる也
(八)此歌は阿闍梨が一生懸命によみしなちんと
(九)中君が
(一〇)さう粗末にも思つて居ぬらしき文句を
(一一)匂宮の文



書かせ給ふ。

中君この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび(一)

使に祿取らせさせ給ふ。

いと盛に匂ひ多くおはする人の、(二)樣々の御物思に、少しうち面痩せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色まさりて、昔人にも覺え給へり。(三)竝び給へりし折は、とり〴〵にて、更に似給へりとも見えざりしを、打忘れては、(五)ふとそれかと覺ゆるまで通ひ給へるを、人々「中納言殿の、(六)骸をだに留めて見奉るものならましかば(四)と、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、(七)同じくば見え奉り給ふ御宿世ならざりけむよ」と、見奉る人々は口惜しがる。(八)かの御あたりの人の通ひ來る便に、(九)御有樣は絕えず聞きかはし給ひけり。(一〇)盡きせず思ひほれ給ひて、新しき年とも言はず、(一一)いやめになむなり給へる、と聞き給ひても、實にうちつけの心淺さには物し給はざりけりと、(一二)いとど今ぞ哀も深く思ひ知らるゝ。(一三)宮はおはします事の、(一四)いと所狹く有り

(一)かたみ―形見、箱
(二)中君
(三)大君に似て居る
(四)別々の美しさにて
(五)中君一人になりし今はつい忘れて大君かと思はれる程大君に似て居るを見て
(六)薫
(七)大君を
(八)中君が薫の妻になる運がなぜ無かつたのであらう
(九)薫に仕ふる人
(一〇)薫と中君と
(一一)薫が
(一二)涙がちに
(一三)中君の心、薫の大君に對する思は一時の淺き戀ではなかつたわいと
(一四)匂宮は宇治へ行く事がむつかしき故

(一)中君を京へ引取ちんと
㊀ 匂宮薫に中君を引取ちんとする事を語る
(二)正二三月中に宮中にて催さるゝ宴會、親王以下參りて詩をつくりなどする例なり、此年は早くありし也
(三)薫
(四)大君を失へる悲
(五)匂の好きなる
(六)薫が
(七)薫の
(八)此花がまだ開かずして匂を内に藏せるは恰も薫が何くはぬ顔して中君を手に入れ居るに似たり、匂は此二人の中を疑ひ居る也
(九)どうせ其樣に疑はれるなら此方も其積りで疾うに手を出すのであった
(一〇)うるさい言ひがかりをする
(一一)字治

がたければ、京にわたし聞えむと思し立ちにたり。

内宴など物騒しき頃過して、中納言の君、心に餘ることをも、又誰にかは語らはむと思し侘びて、兵部卿の宮の御方に參り給へり。しめやかなる夕暮なれば、宮うち眺め給ひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴搔きならしつゝ、例の御心よせなる梅の香をめでおはする。下枝を押し折りて參り給へるにほひの、いと艶にめでたきを、折をかしう思して、

匂 折る人のこゝろにかよふ花なれや色には出でずしたにほへる

と宣へば、

薫「見る人にかごとよせける花の枝を心してこそ折るべかりけれ煩はしく」と、戯れかはし給へる、いとよき御あはひなり。細やかなる御物語どもになりては、かの山里の御事をぞ、まづは如何にと宮は聞え給ふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、當時より今日まで思の絶えぬ由、折々につけて、

哀にもをかしうも、泣きみ笑ひみとか言ふらむ樣に聞え出で給ふに、まして、さばかり色めかしう、涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて、かひ〳〵しくぞあひしらひ聞え給ふめる。空の氣色もはた、實にぞ哀知り顔に霞わたれる。夜になりて烈しう吹き出づる風の氣色、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も消えつゝ、闇はあやなきたど〳〵しさなれど、互に聞きさし給ふべくもあらず、盡せぬ御物語をえはるけやり給はで、夜もいたう更けぬ。世に例あり難かりける中の睦を、匂いで、然りとも、いと然のみはあらざりけむ」と、殘りありげに問ひなし給ふぞ、わりなき御心ならひなゝめるかし。さりながらも、物に心え給ひて、歎かしき心のうちもあきらむばかり、かつは慰め、又哀をもさまし、さま〴〵に語らひ給ふ御樣のをかしきにすかされ奉りて、實に心に餘るまで思ひ結ぼほるゝ事ども、少しづつ語り聞え給ふにぞ、こよなく胸の隙あく心地し給ふ。宮も、かの人近く渡し聞えてむとする程の事ども、語らひ聞え給ふを、薫「い

(一)匂の人となりをいふ
(二)他人の身の上話を聞いてさへ
(三)話しがひある樣に
(四)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる〳〵」
(五)語り盡し得ずして
(六)珍しき薫と大君との戀中の話を匂が聞きて、「あり難かりける」とは、あれ程親しくしながら終に大君が肌を許さざりしをいふ
(七)さうばかりでもなかりしならん
(八)薫がなほ隱し立てして居るらしく
(九)匂は察しのよい人で
(一〇)薫の胸の晴れる位に
(一一)薫が胸のすく心地がする
(一二)中君を引取るべき用意につきて

と嬉しき事にも侍るかな。あいなく自らの過となむ思ひ給へらるゝ、飽かぬ昔の名残を、また尋ぬべき方も侍らねば、大方には、何事につけても、心寄せ聞ゆべき人となむ思ひ給ふるを、もし便なくや思し召さるべき」とて、かのこと人となむ思ひわきそと讓り給ひし心掟をも、少しは語り聞え給へど、いはせの森の呼子鳥めいたりし夜の事は、殘したりけり。心の中には、かく慰め難き形見にも、實にさてこそ、かやうにも扱ひ聞ゆべかりけれと、悔しき事やう〳〵勝り行けど、今はかひなきものゆゑ、常に斯うのみ思はば、あるまじき心もこそ出で來れ、誰が爲にも味氣なくをこがましからむ、と思ひ離る。さても、おはしまさむにつけても、誠に思ひ後見聞えむかたは、又誰かはと思せば、御わたりの事ども心まうけさせ給ふ。

彼處にも、よき若人童などもとめて、人々は心ゆき顔に急ぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒しはてむも、いみじう心細ければ、歎かれ給ふ事盡せぬを、さり

(一)中君を匂に取持ちたるが、薫の過の標に思はるる事を措いて外になき故(二)大君の形見として中君(三)他人としての關係では

(四)中君をあつかましく思召すか(五)何か不都合な關係があるべきやうもなし(六)大大君が中君を自分と思つて驅つてくれよと頼まれしし事(七)中君の闇に入りて一夜をあかせし事は匂にも語ちざりしも、いはせの森の呼子鳥は引歌あるべけれど未詳

(八)薫の心(九)匂の如く自分が中君を引取るべきであつたと(一〇)斯く中君に未練を殘して簡居ては途には不都合な了簡も出て來るべし其ては皆の爲に宜しかるまじと思ひ切る

(一一)薫の心(一二)中君が匂に引取られるにしても(一三)中君の力になる者は我が外には無しと(一四)中君の引移る用意

(一五)字治を見棄つる(一六)字治を見つる我世は經なん菅原や大見の里の荒れまくも惜し

㊀中君引移の用意、薫字治を訪ふ解の尼との對話

とても又せめて心ごはく、堪へ籠りてもたけかるまじく、「淺からぬ中の契も、絶えはてぬべき御住居を、いかに思し得給ふぞ」とのみ、恨み聞え給ふも、少しは理なれば、如何すべからむと思ひ亂れ給へり。二月の朔日頃とあれば、程近くなるまゝに、花の木どもの氣色ばむも、殘ゆかしく、峰の霞のたつを見棄てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寢にて、如何にはしたなく人笑はれなる事もこそなど、萬につゝましく、心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。御服も限ある事なれば、脫ぎ棄て給ふに、御禊も淺き心地ぞする。親一所は、見奉らざりしかば、戀しきこともおぼえず。その御代にも、この度の衣を深く染めむと、心にはおぼし宣へど、流石に然るべき故も無きわざなれば、飽かず悲しき事限なし。中納言殿より、御車、御前の人々、博士など奉れ給へり。

(一)其かひもあるまじく
(二)匂との中も
(三)どうなさる御積りぢやと匂から言はれるも
(四)朔日頃引取るべしと匂より通知し來れる故
(五)「春霞立つを見捨てゆく雁は花なき里にすみやならへる」
(六)雁は常世の國のものと言ひならへり
(七)中君の母は早く死したる也
(八)姉の爲に重き喪に服せんと
(九)陰陽博士、祓の爲に用あれば也
(一〇)喪に服し給ひしは昨日今日の樣に思ひしに早除服の時になりける上、霞の衣は喪服をいひ花の紐とくとは中君の除服の爲に花やかなる衣裳を調へたるをいふ
(一一)中君より目下の人に賜はるべき品

(一〇)はかなしやかすみの衣たちしまに花のひもとくをりも來にけり

實にいろ〳〵いと淸らにて奉れ給へり。御わたりの程のかづけものどもなど、事

(一)薫が昔を忘れず世話し下さるは有難き事にて
(二)中君に
(三)はでやかならぬ
(四)生活上の薫の世話を有難く思ひて中君に言ひ聞かす
(五)中君が薫を
(六)薫を離れて匂の世話になるを
(七)中君が
(八)薫
(九)中君が京へ引移るべき前日の朝
(一〇)大君が存生ならば今頃は段々馴染みて、薫の心
(一一)斯く大君を引取らんと思ひ附きし事なるに
(一二)大君の兼子
(一三)大君が靡かぬものの流石厭ひもせず、薫の心
(一四)我が遠慮勝なる心から遂に終まで本意を遂げざりし悔しさよと
(一五)簾を
(一六)大君を
(一七)泣顔つくりあへり
(一八)明日の引越の事も考へられず

事しからぬものから、品々こまやかに思しやりつゝ、いと多かり。侍女「折につけては忘れぬ(一)様なる御心よせの有りがたく、兄弟なども、得いと斯うまではおはせぬわざぞ」など、人々は聞え知らす。(二)あざやかならぬ古人どもの心には、かゝる(三)方を心にしめて聞ゆ。若き人々は、侍女「時々も見奉りならひて、今はと異様になり(四)給はむを、さうゞしくいかに戀しう覺えさせ給はむ」と聞えあへり。(五)(六)(七)

自らは、渡り給はむこと明日とてのまだつとめて、おはしたり。例の客亭の方におはするにつけても、今はやうゝ物馴れて、我こそ人より先にかうやうにも思ひそめしかなど、ありし様宣ひし心ばへを思ひ出でつゝ、流石にかけ離れ、殊の外になどは、はしたなめ給はざりしを、我が心もて怪しうも隔たりにしかなと、胸いたく思ひつゞけられ給ふ。垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をばおろし籠めたれば、いとかひなし。内にも人々思ひ出で聞えつゝ、うちひそみあへり。中の君は、まして催さるゝ御涙の川に、明日のわたり(八)(九)(一〇)(一一)(一二)(一三)(一四)(一五)(一六)(一七)(一八)

も覺え給はず、ほれぐしげにて眺め臥し給へるに、臺月頃のつもりも、そこはかとなけれど、いぶせく思ひ給へらるゝを、片端もあきらめ聞えさせて、慰め侍らばや。例のはしたなくなさし放たせ給ひそ。いとどあらぬ世の心地し侍り」と聞え給へれば、中君「はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや、心地も例の樣にも覺えず、かき亂りつゝ、いとどはかぐしからぬ僻事もやと、つゝましうてなむ」と、苦しげに思いたれど、「いとほし」など此彼聞えて、中の障子の口にて對面し給へり。いと心恥かしげになまめきて、又この度はねびまさり給ひにけりと、目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見え給へるを、姫君は、面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いと哀と見奉り給ふ。臺「盡きせぬ御物語なども、今日は言忌すべくや」など言ひさしつ。臺渡らせ給ふべき所近く、この頃過してうつろひ侍るべければ、夜中曉とつきづきしき人の言ひ侍るめる、何事の折にも疎からずおほし宣はせば、世に侍ら

(一)胸の思を打明けて
(二)他人あしらひをせちるくな
(三)さうされては彌ゝ知ちぬ世界にでも行つた心持になる
(四)つまらぬ受對へでもするかと思つて遺憾勝になる
(五)御會ひなされねば黨へ御氣の毒
(六)黨の樣子
(七)中君が黨を見るにつけて大君の事を思ひ出でたる也
(八)引移りの吉日の前日なれば遠慮すべしと也
(九)君の御引越先の御近處へ此頃に私も引越す筈故中君は二條院、黨は三條院へ引移る也
(一〇)親しき同士は夜中曉といはけず往來するといふ俗諺の通り
(一一)私の一生涯は御贔意に願ひたく思ふが

む限は、聞えさせ承りて、過さまほしうなむ侍るを、如何は思召すらむ。人の心さまぐに侍る世なれば、あいなくやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞え給へば、中君「宿をばかれじと思ふ心深く侍るを、近くなど宣はするにつけても、萬に亂れ侍りて、聞えさせやるべき方もなくなむ」と、所々言ひ消ちて、いみじく物哀と思ひ給へるけはひなど、いとよう覺え給へるを、心から餘所のものに見なしつると思ふにいと悔しく思ひ給へれど、かひなければ、その世の事かけても言はず、忘れにけるやと見ゆるまで、けざやかにもてなし給へり。御前近き紅梅の、色も香もなつかしきに、驚だに見過しがたげに打鳴きて渡るめれば、まして「春や昔の」と、心を惑はし給ふどちの御物語に、折哀なりかし。風のさと吹き入るゝに、花の香も容人の御匂も、橘ならねど昔思ひ出でらるゝつまなり。徒然の紛らはしにも、世の憂き慰にも、心留めてあそび給ひしものをなど、心にあまり給へば、

(一)斯樣な事をむざと強ふるもどんなものかと思つて必ず其樣にするとも極められぬ
(二)此舊宅を棄てたくはなしと切に思ひ居る處へ是かちはお互の住居が近くなるべしなど仰せらるるにつけても
(三)大君に似たるを
(四)驕の心、我心がちで此人を他人のものにして仕舞ひし事よと
(五)以前の關係
(六)きつぱりと色氣はなれて
(七)「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」
(八)大君を思ひて
(九)「さ月まつ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする」
(一〇)中君の心
(一一)此梅に大君が

中君見る人もあらしにまよふ山里にむかしおぼゆるはなの香ぞする

言ふともなく仄にて、絶え〴〵聞えたるを、懐しげに打誦じなして、

薫袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる

堪へぬ涙を様よく拭ひかくして、言多くもあらず。薫「又も猶かやうにてなむ何事も聞えさせ寄るべき」など、聞え置きて立ち給ひぬ。御わたりにあるべき事ども、人々に宣ひおく。この宿守に、かの髭がちの宿直人などは侍ふべければ、このわたりの近き御庄どもなどに、その事ども宣ひあづけなど、まめやかなる事どもをさへ定め置き給ふ。

辨ぞ、辨「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらく覺え侍るを、人もゆゝしく見思ふべければ、今は世に在るものとも人に知られ侍らじ」とて、容貌も替へてけるを、強ひて召出でて、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、薫「こゝには、猶時々參り來べきを、いとたづきなく心細かるべきに、かくて

(一)あらし―嵐、有らし
(二)薫が中君の歌を誦したる也
(三)大君の愛せし梅は昔の如くなれども中君が京へ移る事になりては此舊宅も昔の家とは思はれず
(四)此樣にして又も目にかゝりて萬事御世話申上ぐべし
(五)引越につきての指圖を薫が人々にしおく
(六)此舊邸の留守居としては
(七)薫の領地の支配者に此字治邸の監督の事など言ひ附け
(八)今更京への御供をするにつけても
(九)尼になりたるを
(一〇)薫が
(一一)此字治へは
(一二)誰も居なくては便なく心細かるべければ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong